

総本山知恩院の年中行事

——知恩院の三つの顔と『年中行事録』——

今堀 太逸

〔抄録〕

知恩院は実に行事の多い寺である。その継続的な運営は、知恩院役所の差配により実施されていた。宝暦八年（一七五八）、役所において編纂された『年中行事録』は、総本山の行事・法要の詳細な記録である。季節の移ろいとともに、連綿と続いている知恩院行事が凝縮されている。

年中行事を日付ごとに概観すると、年頭の祝儀・行事に関するものが半数近くあり、正月に集中している。二月より減少、後半、七月盆、歳末に増加している。徳川家の法要、所司代以下の武家

方（大名衆）参詣の記事が、御忌法要、毎月二十五日の法然上人御報謝説法とともに中心をせている。

関東の檀林住職が台命住職として晋山した時代の知恩院の研究に、年中行事を読み解くことで新たな視点を提供する。

キーワード 御忌、廟堂知恩院、天皇の勅願所、將軍家菩提所、
台命住職

はじめに — 知恩院の三つの顔 —

①松平家・徳川家の菩提所

明和五年（一七六八）、知恩院が幕府からの徳川家との由緒についての問い合わせに、「知恩院は、法然上人入滅の建暦二年（一一二二）

より慶長八年（一六〇三）の秋まで三九二年が過ぎ、大檀那権現様（徳川家康）が知恩院一寺に御開基なし下され置き慶長八年より明和五年まで一六六年になる」と答えている。そして、家康が知恩院を一族（松平家・徳川家）の菩提所としたのは、先祖松平親忠の五男超誓存牛住持の寺（知恩院二十五世）であることによると説明している。

慶長八年（一六〇三）、家康が大檀那となり「一寺に御開基」とは、前年の慶長七年八月二十八日（命日は二十九日）の夜半、伏見城に滞在中の母於大（七十五歳）が亡くなった。知恩院二十九世満譽尊照はただちに登城、法号「徳泰院」を授け、知恩院において満譽導師のものと葬式・中陰の仏事が営まれた。その後、遺骸は江戸に送られ、増上寺十二世源譽存応を導師として小石川大塚で火葬、寿経寺（後に伝通院と改称）に葬られた。この際に源譽が授けた法号が「伝通院」である。⁽¹⁾

翌慶長八年二月、家康は朝廷より征夷大將軍に任じられると、母の菩提を弔う堂舎の造営を知恩院に命じた。思うに、母の法号「徳泰院」には、徳川家の安泰の願いが込められている。家康が法然上人と母の尊霊に天下安穩・武運長久の願いを込め、堂舎造営を決意したことは、家康の浄土宗への帰依、京都滞在中の廟堂知恩院への度々の参詣からも窺うことができる。

翌九年、母の一周忌に知恩院に参詣、造営工事を見学、十月には寺領を七百三十石に増領している。慶長十年（一六〇五）二月、家康が駿府、子息秀忠が江戸を出立し上京、秀忠が征夷大將軍に任じられた。家康は、母の月命日である七月二十九日に知恩院を訪問すると、黄金二百枚を持参している。同十二年には、後陽成天皇へ奏請し、天皇の八宮を知恩院宮門跡と決めている（良純法親王）。

伽藍が落成した慶長十五年（一六一〇）五月、前年に朝廷より僧正法印に任じられた満譽は、駿府の大御所家康、江戸の將軍秀忠に御礼のため東海道を下っている。

経緯は省略するが、江戸時代將軍家の菩提所となった知恩院本堂には、山上の知恩院（勢至堂）より法然上人像が迎えられ、本堂脇東仏壇には中興満譽尊照と、寛永十年（一六三三）一月、火災により本堂以下の伽藍が焼失したのを再建、同十八年、將軍家光に江戸城において「天下和順」の法問を説いた三十二世雄尊靈巖の両上人像が安置されている。そして、本堂脇西仏壇には、母徳泰院像とその左右に家康・秀忠の二人の束帯像（將軍像、「帝都鎮護の御影」）、大方丈仏間には歴代將軍の位牌が安置されている。

②天皇と知恩院

法然建暦二年（一二二二）正月二十五日、門弟らから「大谷の禪房」とよばれた坊舎（現在の知恩院勢至堂の地）で寂した。遺体は弟子達によりその東崖上に葬られ、廟堂が建立された。この御廟は東大寺造仏・造寺長官藤原行隆を父とする高弟信空が管理していたが、上人の遺徳を慕い、その念仏の教えに導かれて往生をとげようと道俗貴賤の参詣が後をたたず、廟堂は念仏者の聖地となった。

嘉禄三年（一二二七）、法然門弟の念仏勸進の影響力の大きさを憂えた延暦寺は、専修念仏の停止を訴えて廟堂を破却した（嘉禄の法難）。その後、源智が「大谷寺」として復興し、法然を開基とした。四条天皇より大殿に「大谷寺」、廟堂に「知恩教院」、総門に「華頂山」の勅額を賜ったとは、『総本山知恩院旧記採要録』（『旧記採要録』）の次の記載による。⁽²⁾

・第二世勢観房源智大和尚（備中守師盛の息、小松内府重盛公の孫）。

一宗の秘訣、円頓戒口授の弟子多き中、此の人を撰て遺跡を附属し、道具・本尊・坊舎・聖教、残る所なく是を相承し、正嫡芳しく化導ますます広く、増進の輩いよいよ多し。

・時に嘉祿三年、並覆堅者定照、念仏流行の盛なるを憎み、言を山門に触れ、宗祖大師の墳墓を破却す。文暦元年源智上人奏聞を遂げ、旧房を再興して、先師二十三回正忌の追福を営み、慈恩を報謝し化益大なり。

・四条院その功の多きを叡感の余り、山院寺号を勅撰し給ひ、則ち廟堂に知恩教院、大殿に大谷寺、総門に華頂山の勅額、及び華頂尊者の諡号を賜ふ。

この『旧記採要録』の編纂については、五代將軍綱吉とその母桂昌院の法然上人崇敬により、廟堂知恩院に東山天皇から円光大師号が贈られた元禄十年（一六九七）以後、知恩院において源智上人五百回忌法事が二夜三日執行された元文二年（一七三七）の頃である⁽³⁾。

知恩院役所において、後述する三つの顔を持つ廟堂知恩院の歴史認識のもとに編纂された知恩院史であり、廟堂知恩院、「大谷寺」の始まりを天皇への奏聞による再興と記載していることに注目したい。

勢観房源智の生涯については不明な点が多いが、法然の没年である建暦二年（一二二二）に師恩に酬いるために、四万五千人にのぼる人びとに念仏勧進し、その結縁交名を胎内に納入した阿弥陀仏像を造立していたことが明らかとなっている。昭和五十四年（一九五七）、滋賀県信楽の玉桂寺の木造阿弥陀仏像の胎内から、建暦二年（一二二二）十二月十六日付の源智の造立願文と交名帳が発見されたのである。

この阿弥陀仏像の造立の目的は、我が師上人の恩徳、すなわち我師の引導により、速やかに有縁無縁の道俗貴賤の結縁衆が九品仏家（浄土）に生まれることを願うことにある（「造立願文」⁽⁴⁾）。

筆者は、重源が東大寺再建の大事業を達成できたのは、『選択集』の編纂により万民を平等に救済する選択本願の念仏勧進の思想が確立したことによるものとの指摘をした。法然の説いた念仏信仰は、全国民の救済を願う東大寺大仏（盧舎那仏）の信仰と一体のものとして展開していたのである⁽⁵⁾。

源智の勧進上人としての活動を支援したのが天皇家であり、四条天皇が法然の廟堂の再興に際して、その功に叡感のあまり勅額を下賜したものと、『旧記採要録』の記載が読み取れるのである。知恩院は度々火災（永享・応仁の罹災）にあうが、その都度再建され一宗の本寺へと展開するが、その復興は道俗貴賤の喜捨によりはたされた⁽⁶⁾。

戦国期の知恩院住職は、前任住職の遺言または推薦と、末寺（門徒寺院）の衆議により決まり、朝廷より「勅願所住持職」の綸旨を賜わること例とした。

家康先祖である超誉存牛も、前住二十四世肇誉訓公の遺言、知恩院門末寺院の懇請、後柏原天皇の綸旨により永正十八年（一五二一）一月入寺（晋山）している。存牛は大永四年（一五二四）一月十八日、後柏原天皇より「毎年京畿の門葉を集め、七日間の御忌を修せよ」との詔勅を賜わり（「大永の御忌鳳詔」）。二年後の同六年四月七日、後柏原天皇崩御の際の臨終には参内、御十念を授けている（臨終の善知識）。四月二十日、天皇所持の恵心筆「阿弥陀来迎図」が知恩院に下賜

された。

存牛は、同大永六年六月二十日の後奈良天皇代はじめの御礼に参内。同七年一月十六日の禁裏百万遍念仏会には知恩寺慶秀とともに参内、天皇は三月十八日に『法然上人行状絵図』を覧覧している（『御湯殿上日記』）。

念仏の教えとその実践の要点を一紙にまとめた「一枚起請文」は、建暦二年（一二二二）正月二十三日に、源智の請いに応えて法然が著したと伝えられる。浄土宗に帰依する人びとにより、くり返し書写されているが正親町天皇も書写している（知恩院什宝）。正親町天皇はまた永禄十二年（一五六九）八月十一日、二十八世浩誉聡補を宮中に召し、知恩院の宝物を覧覧、『無量寿経』四十八願文のうち、第十八願「念仏往生願」の談義を聴聞している（『御湯殿上日記』）。聡補はまた、天正三年（一五七五）、長篠の合戦の際には、家康に使僧を送り戦勝を祝っているが、その家康の返書が知恩院に伝来する（六月二十二日付文書、知恩院蔵）。

家康の帰依した満誉尊照も文禄四年（一五九五）、前住浩誉聡補の推挙により、後陽成天皇より「勅願所知恩院住持職」の綸旨を賜わり、参内、宝祚延長を祈っている（「知恩院文書」）。知恩院には後陽成天皇の宸翰名号「南無阿弥陀仏 観音 勢至」一幅が伝来し、書道史上の名品として知られている。

③ 台命住職の時代

徳川家康が大檀那となり開基の一寺となると、知恩院住職の遷化と

ともに、関東の檀林寺院（寺は松平・徳川家の菩提所でもあった）を歴住した僧が江戸城において、將軍により任命（台命）されることになった（「台命住職」と呼ばれている）。満誉尊照と江戸幕府の取り決めでは「知恩院無住の節は、関東の十七檀林の内より器量の僧を選び、先住が申し置くこと。并に京都・大坂の知恩院末寺が相談の上、書付をもって（幕府）に言上すること」であった。ところが、知恩院からの「書上」に誤りがあったことより、延宝二年（一六七四）五月、三十八世玄誉万無の任命からは増上寺方丈（住持）の「書上」となり、京都・大坂の知恩院門中の意向が住職任命に反映されなくなった。

通例は、寺格上位の鎌倉光明寺、または伝通院の住職が推挙されるのであるが、辞退の場合は、寺格下の檀林住職が任命された。ちなみに、台命住職は三十世城誉法雲から七十三世名誉学天まで四十四名である。知恩院住職の場合、高齢（六十歳台）での入寺となり、在住期間は五年前後、多くは遷化による交代となった。

江戸城において知恩院住職に任命されると、住職は弟子衆とともに上洛、知恩院での入寺式をおえると、直ちに参内、綸旨を賜った。翌年には、継目御礼のため江戸に下向、將軍に拝謁した。知恩院住職としての在住の期間（数年から十年未満）は、関東から随従の「寮坊主」（筆頭弟子、「寮主」とも呼ぶ）以下の弟子衆が方丈を預かり、高齢住職を補佐、法務・寺務全般にたずさわった。

④ 役所と「寺引き渡し」

四十八世堅誉往的から四十九世称誉真察への住職引き継ぎを紹介し

たい。

堅誓往的は深川靈巖寺（十世）、飯沼弘経寺（三十六世）、小石川伝通院（二十四世）を経て享保十七年（一七三二）、知恩院住職として晋山した（六十五歳）。元文三年（一七三八）四月二十五日逝去、在住六年余、七十一歳であつた。このとき往的の弟子たちは、四月二十九日に帳場『日鑑』を役所に納め、五月三日に帳場帳面を役所に持参、「寺引き渡し」をしている。本堂・集会堂・阿弥陀堂・小方丈・大方丈・大庫裏・小庫裏・御対面所・大茶堂・御居間通・奥土蔵。ほかに山亭と米藏等迄が引き渡されている。

引き渡しが済むと、役者報恩寺が二条三所に赴き、知恩院什物、その外諸色残らず改め、先住堅誓往的の弟子中より、六役者・山役者が受け取つたことを、先格の通りお届けする旨の口上書を差し出している。

知恩院四十九世として晋山した称誓真察は、檀林飯沼弘経寺（三十七世）、鎌倉光明寺（五十九世）を経て、元文三年（一七三八）五月十六日、江戸城で台命住職を仰せつけられた（六十九歳）。八月二十三日知恩院に入寺、御対面所において、役所よりの「寺引き渡し」があつた。関東よりの随従は「弟子四人・弟子次兩人・所化衆十五人ほど・近習十人ほど」の三十数名であつた。「御入院御規行列の次第」（晋山式）は九月二日、紫衣綸旨頂戴のための参内は九月二十三日、その翌日に二条三所（所司代・両町奉行）に出駕、入院の挨拶をしている。真察は在住七年、延享二年（一七四五）四月四日に逝去（七十歳）している。

⑤ 役所と年中行事

知恩院の継続的な運営は、知恩院役所の役者差配により行なわれていた。役者には京都門中から「入れ札」により選出された六人の役者（六役）と、塔頭住持より選ばれた二名の役者（山役）がいた。役所と方丈（住職）との折衝は寮坊主を通して行われた。⁽⁷⁾

宝暦八年（一七五八）七月に、知恩院役所において編纂された『年中行事録』乾・坤（二冊仕立て）は、総本山知恩院の年中行事の詳細な記録である。乾には正月元旦より晦日、坤には二月一日より十二月大晦日までを記載している。⁽⁸⁾

明和八年（一七七二）十二月八日、江戸城において知恩院五十七世住職に任じられた鎌倉光明寺六十九世檀誓貞現は、翌九年正月十三日に入院した。翌十四日の「寺引き渡し」において、寮坊主大空に『年中行事』一冊、『年中御進物帳』一冊、『京・大坂・其外田舎門中寺院交代、隠居并弟子御目見御礼式帳』一冊、右三冊、寮坊主へ相渡ししたことが、役所『日鑑』に記載されている。

⑥ 役所『日鑑』と『年中行事録』

『年中行事録』には、知恩院住職の年頭の参賀、二条三所への関東御機嫌伺い以下、その申し入れ、進物を含む当日の仕度、道行き、通る門、休憩の座敷、役職による挨拶の場所などに、細かい規式・礼式が記載されている。

住職の頻繁な交代にもかかわらず、御忌法要を始めとする四季折々に行われる法要・儀礼・出駕の儀式が、毎年同じように繰り返すこと

ができたのは、役所において『日鑑』に記載され、『年中行事録』が作成されて、歴代住職により先例として継承されてきたことによるのである。

『日鑑』は、役所において月番の役者が責任を持って毎日の出来事を記録したものであり、その年の年中行事が日々の出来事として記載されている。時に、新住職の意向により、これまでの礼式が変更されたり、取りやめられる場合がある。その時には、その理由が記録されるとともに、役者からの申し出も掲載している。当時の『日鑑』を参照することで、後年の編纂である「由緒書」や「古記録」との異同、今日に伝承されている由来と、実際の理由との違いを確かめることもできる。⁽⁹⁾

『年中行事録』を日付ごとに概観すると、年頭の祝儀・行事に関するものが一年分の半数近く、正月に集中している。行事は二月より減少するが、七月盆行事と十二月、歳末に増加している。徳川家の法要、所司代以下の武家方（大名衆）参詣の記事が、御忌法要の年間行事、毎月二十五日の法然上人御報謝説法とともに、その中心を占めている。住職の出駕や武家方の参詣については、休息の部屋・座席・料理の種類や器、住職への御目見、送迎の場所等は厳格であった。順序よく記されていて、引き継ぎ者に視覚的に認識できるように簡潔に纏められている。

本稿では、関東の檀林住職が台命住職として知恩院に晋山した時代の知恩院を、年中行事を読み解くことで、

①凡夫が往生できることを説いた法然上人の廟堂、末寺・信徒が崇

敬する浄土宗総本山

②天皇が帰依し、宝祚延長・国家安寧を祈る天皇の勅願所

③武運長久・国家安全を祈る將軍家（松平家・徳川家）の菩提所
との三つの顔を浮かび上がらせる。

『年中行事録』には、四季折おり移ろい行くなかの年中行事の中に、連綿と続いてきた知恩院の歴史が凝縮されている。知恩院の歴史を再認識するための新たな視点を提供する。

第一『年中行事録 乾』

— 正月行事 —

正月三箇日

知恩院の元旦は子の中刻、九ツの時計を限り、知恩院住職である尊前（以下、方丈と呼ぶ）に手水を差しあげ、装束を召し替えて御内御祝儀に出席されることから始まる。「御内祝儀」の規式、それに続く大師（法然上人）像開帳を紹介したい。

御内祝儀は、方丈が規式をゆるゆる調えられるよう、一番鐘早々より始める。

「御対面所勤行」 方丈は、御直綴・五条で出座。本尊前、御師範上人前に焼香・三拝。方丈内の僧は、出世僧は香衣、勢至堂看守は黒衣で出勤する。句頭は内帳場（僧）が勤め、四奉請・四誓偈一返・十方恒沙仏の文 同一返、〈御師範御回向〉、念仏一会。終わると、寮主（筆頭弟子）を始め、丈内所化中一同、前三後一拝、御十念を拝受。

この時、中小姓・右筆迄、一同に祝儀を申し上げ、弟子中より梅花、随従よりは水仙、中小姓中より福寿草を献上する。

次に口祝い、次に菌堅（はがため）、梅干・御茶。次に各盆にて屠蘇酒を廻す。給仕は中小姓がするが、右筆なども頼む。次に盃事がある。寮主より右筆迄、残らず返盃申し上あげ、御核（かく。酒肴、料理）を奉る。手長（給仕）は内帳場が勤める。御盃頂戴の席は、寮主は中敷居の下横二畳目、同三畳目に内役、同四畳目に香衣僧、同五畳目に黒衣僧、六畳目に中小姓・右筆が座る。

終わると、寮主・内役は、方丈と御雑煮を相伴（御吸物・御酒等が出る）する。方丈が御入りになると、直ちに大茶堂において、寮主・内役中（方丈の弟子衆）へ、丈内所化衆・中小姓・右筆等が祝儀を申し入れる。

「大師（法然上人像）開帳」は、一番鐘が過ぎ、拍子木を打廻る時、当番の大衆一ヶ院（塔頭）が登堂して、大師を開帳奉り、御茶湯を献じる。この御茶并に立花は、大衆中より献じる。御茶所は大方丈柳の間に設ける。子の刻に仲間一人に若水桶一荷に吉水を汲ませ、御茶湯并に小庫裏湯釜へ加えておく。

大師御茶湯の下りを堂司が大茶堂迄持参し、方丈に差し上げる。丈内の上分は残らずこれを頂戴する。なお、本堂前左右の石灯籠は、三箇日・六日・年越し等には燃（とも）す事とみえる。

二日には、庫裏下がりの勤行がある。毎年の行事を『日鑑』の記事より考察した山西泰生「知恩院『韋駄天像』の見た正月二日」がある⁽¹⁰⁾ので参照されたい。

元旦の記事に、瓢箪を叩いて、空也作という和讃や念仏を唱えながら京都の町を巡った鉢叩きの来訪を⁽¹¹⁾、「例年、今日、た、き来たる。小庫裏において、雑煮・酒、并に鳥目三百銅・扇子三本を下され候事」と記している。また、祇園・春日・愛宕・北野・鞍馬・賀茂下上・清水・因幡堂・竹生島・天川・伊勢内宮・同外宮などからの祈禱札到来と初穂料の記載がある。二日には武家方参詣に対する仕度の覚書を掲載している⁽¹²⁾。

【行事一覧】

「一日」

①元旦の勤行と祝儀

「一」子の中刻、一番鐘。御内御祝儀

「二」丑の上刻、二番鐘。大師前法要

山内大衆参堂、尊前昇堂、法要。集会堂本尊・文殊前、御拝・焼香

「三」寅の上刻、大方丈仏殿法要、大方丈御規式

関東御年頭使・四日御名代仰せ付け。御盃事規式

□宝暦六年規式変更 □御規式後 諸役年礼

「四」卯の上刻、京門中集会。卯の中刻、集会堂御規式

□京門中年礼

②日中・連夜の勤行と祝儀

□朝節 □一山斎、非時 □門主へ六役・門中年礼 □大師前日

中勤行 □夕節 □大師前連夜勤行

③鉢叩きの来訪・諸寺社の祈禱札到来の覚書

〔二日〕

□大師前勤行 □集会堂勤行 □大方丈仏殿御齋会 □一山齋、非時 □朝節 □方丈、門主へ年礼出駕 □大師前日中勤行 □夕節 □東九条村年礼 □大師前初夜勤行 □庫裏下りの勤行 韋駄天前 歳徳神 大黒天 □御対面所勤行 □四日名代の昼休み宿坊 □謳初め

〔一〕 武家方の参詣についての覚書

□参詣の遠見 □方丈の装束・応対・饗応 □料理の用意
□所司代参詣の案内、その文面等 □所司代参詣の際の出迎え・饗応 □武家方の香奠

〔三日〕

□大師前勤行、三日御祝儀 □集会堂勤行 □一山御齋 □入信院御礼 □一心院役僧御礼 □西院村年礼 □四日御名代の供の申渡し □大師前日中勤行 □大師前常日勤行 □夕節、三日御祝儀 □小本寺方年礼入来

四日～十日

六日には、新春を寿ぐ祝福の芸能である万歳が訪れ、祝舞を時計の間で舞っている。七日には七草の祝儀（節句の勤行と七草粥の御齋）が行われている。

・六日、万才（歳）来たる。時計の間廊下において舞う。夕飯并に鳥目五百銅・扇子六本を下さる。御入院初ての年は、御名号を下さることもある。

・七日、一山七草の御祝儀、御齋あり。但し、御酒は不出の事。御対面所において七草の御粥、例の如し。役中・寮主御相伴。御酒は不出の事。

この期間の主要行事としては、知恩院住職の名代として、役者（六役・山役）が京都門中の中で知恩院と特別の由緒を持つ十九箇寺を年頭の挨拶のため廻礼する習わしと、住職以下役職者の二条三所（所司代・両町奉行）への年礼出駕（九日）がある。¹³¹⁴

五日に、「入蔵（月番・山役）。鳳詔（ほうししょう）出し置く。御忌祭文は、兼ねて尊前へ差しあげ置き候事」との記事があるが、宝蔵への入蔵は厳重をきわめ、役所においてその出納がなされたので、台命住職や弟子衆が関与することができなかった。

八日は厳有院（四代將軍綱吉）、十日は常憲院（五代將軍綱吉）の命日である。徳川將軍の命日法要と式日勤行については後述する（二月の行事参照）。

【行事一覽】

〔四日〕 □方丈名代による十九ヶ寺巡廻（「四日御名代」と呼ぶ）

□覚了院（御殿院家）年礼 □諸堂飾り餅をとる

〔五日〕 □四日名代登山 □上御霊社神楽料 □入蔵（月番・山役）鳳詔・御忌祭文 □大工仲間・二瀬柴屋より献上物

〔六日〕 □御門主の参詣 □大師前御逮夜 □万才来たる □二条表等進物の認め様 □一山非時 □夕節 □明日、京門中門主へ年礼

へ年礼

〔七日〕 □大師前勤行 □集会堂・大方丈法要 □七草粥の祝儀

□京門中門主へ年礼 □一心院・良正院へ二条表出札の申渡し
〔八日〕□嚴有院（四代將軍綱吉）命日、大方丈御齋会 □伏見
北・南組より年礼 □藤森誓願寺より年礼

〔九日〕□二条表等年礼出駕 □青蓮院宮、小本寺方より年礼 □
武家方への年礼

〔十日〕□常憲院殿（五代將軍綱吉）命日 大方丈御齋会 □膳所
城主・縁心寺へ年礼 □御忌鳳詔使巡廻の準備 □宝鏡寺宮よ
り年礼使者

十一日から十七日

この期間の主要行事としては、十一日に御忌鳳詔使の巡廻がある。

・十一日 鳳詔使、卯の刻、山内の一臈登山。菊の間において一汁
五菜の御料理を下さる。右、畢つて、鳳詔使道具衣・九条、念
珠・座具、（役者）月番・山役詰る。御対面所において尊前御出
座。御直に鳳詔を渡さる。一臈拝受。即御次の間、東の方西向き、
三方に乗せさし置く。同間、下より横三疊目にて拝礼、御十念。
直に御忌導師の寺院方へ巡回する。中食所は去る七日、行者より
内達あり。饗応は下々迄、その寺より賄う。此の方よりも、割子
（破籠、弁当箱）十持ち遣わす事。

十四日は大師前御逮夜、日待ち。十五日は式日勤行の日であり（二
月十五日参照）、大師前勤行・鎮守社祭礼・集會堂御拝・大方丈法要
がある。その後、対面所において、方丈と小豆粥を相伴する。小正
月の小豆粥食は一年中の邪気を祓う習俗であり、全国的にみられる。

・十五日 小豆粥。御対面所において月番・山役・寮主、例の通り、
御相伴。但し、退散の時、御規式あい済み候御歎びのため、拝礼
の事。

そして十六日には、大師前勅願祈禱法要がある。この祈禱の巻数は
下旬の参内のさいに献上する。

・十六日 大師前勅願祈禱、卯の刻過ぎ鳴鐘、尊前御昇堂、大衆
出仕。〔法要〕、伽陀〈天下和順の文〉・四誓偈二卷・仏身觀二
卷・護念經三卷・三念仏・〈神力演大光の文〉・阿弥陀大呪五反・
引声念仏〈割笏〉・後唄・〈国豊民安の文〉・御回向、畢つて、巻
数・御洗米頂戴。大衆・伴僧中迄頂戴の上、御下堂。

但し、正・五・九月、各十六日、かくの如き事。

十七日は、大旦那神君様（徳川家康）の命日であり、大方丈勤行の
あと「東照宮御影堂」（権現堂）での勤行がある（四月十七日参照）。

【行事一覽】

〔十一日〕□鳳詔使巡廻 □淀、伏見奉行へ年礼 □膳所城主入來

□嵯峨清涼寺年礼 □三條法林寺年礼 □入江御所年礼 □衆

人頭 多讃岐守方へ御忌出勤の依頼

〔十二日〕□淀城主より年礼使者 □清涼寺・法林寺へ年礼使者

□宝鏡寺宮 入江御所へ使僧 □伝供講頭へ扇子 □山内各院

檀那へ扇子

〔十三日〕□大坂御城代 町奉行 堺奉行等へ年礼 □南都奉行

東大寺龍松院へ年礼 □八十宮御方（七代將軍家継室・靈元天

皇娘）より年礼 □松平下総守（伊勢桑名藩主）より年頭御祝

詞 □江戸檀林方より年始御祝詞 □大坂役寺惣代年番登山

□二条大番頭衆より年札・返札の使者 □武家方参詣の準備

□御所司参詣有無の手紙

〔十四日〕□文昭院（六代將軍家宣）命日 清揚院（家宣の父）回

向 大方丈勤行 □武家方参詣 □大師前御逮夜 □日待ち

□夕節 □八十宮方へ使僧

〔十五日〕□式日勤行（大師前勤行 鎮守社祭礼 集会堂御拝 大

方丈法要） □小豆粥 □一山御斎 □西院村・九条村、百姓役

登山 □門主より年始返札 □伝供講中登山・入講報謝銀 □

祈禱法要卷数案文の仕度 □門主へ御忌参詣有無の伺い □御

忌配役の大奉書 □本堂道心者加増

〔十六日〕□大師前勅願祈禱法要 □月番・山役入蔵（善導曼荼

羅・転衣御影・御忌用御袈裟・割笏・歴代の袈裟等） □御忌用

本堂諸道具の取出し、行者支配により飾る □大坂門中御忌登

山・諸末山より御忌御報謝料 □御忌中の水茶屋・辻内等の願

書・帳面・証文の提出 □御忌中の雑色番所・百姓番所を建て、

用水桶に水汲み

〔十七日〕□東照宮（徳川家康）命日 大方丈勤行・東照宮御影堂

（権現堂）勤行 □一山御斎 □堺旭蓮社年札登山 □二条三

所へ御忌法会届書 □火の用心等の触書 □明朝愛宕山代参

（御影十五枚・火除け札三十五枚）

十八日から二十五日

御忌法要については、『知恩院史』（知恩院、一九三七年）に詳しく、また、知恩院式衆会の「御忌大会法則」以下、詳しい法要差定が刊行されている。比較、検討してみてほしい。それらに掲載されていない記事の一部を紹介しておきたい。

十八日・本堂西仏壇へ、松平山城守殿（松山藩主）御先祖靈膳三膳、御忌中供える。本堂において行者仕立てる事。

・御法事中、毎日風呂焚き申す。風呂場入り口へ、役者中・弟子中、右の外、五ツ時より入湯あるべき事。右の張り札致す事。

・池の坊并に門弟入来。本堂大立花両瓶、門弟立る。御厨子前小瓶は池の坊立る。朝夕一汁五菜・酒等を出す。給仕は御出入りの町人。月番・山役挨拶に及ぶ。夕飯過ぎ御対面所において、尊前御対顔。扇子三本入一台献上。山役披露、御十念はなし。例年の通り、立花御太儀の旨仰せ述べられる。尊前、重畳御着座。池の坊、内三畳目に着座。扇子は四畳目に差し置く。退出の時、山役が手水場迄送る。供の者へも一汁香五菜、朝夕共出す事。

・集会堂廊下口・時計の間に、方丈拝見停止の張り札。同集会堂三方の縁に法度書を張る。役所の前、膳棚の上に楽人・雑色饗応書、并に食座次第書を張る。大庫裏伝供部屋・菓子部屋に役配并に食座の次第書・火の用心の札。小庫裏行事部屋南に食座并に風呂座次書を張る事。

・大方丈庭上に竹垣結切る。唐門より参詣の道俗、御法会中拝見

致させる事。

・山内煮売り茶屋共へ、火の用心、その外騒が敷事あれば、早速、その場所へ立合い、静り候ように山廻りより急度申渡させる事。

・新番所・丈内夜番等、別て夜分大切に相守り候よう、下納所より申渡させる事。

廿四日・糸割符年寄入来。尊牌前へ饅頭五百献上。この饅頭、今朝門中等へ菓子に出す。柳の間において御斎、御酒・饅頭二ツ充を下さる。導師拝礼過ぎ、尊前御対顔ある事。

・清水坂ものよし（物吉）来たる。白米一斗・鳥目百文を下さる事。

・今晚五ツ時、尊前御十念に御出堂。万事宿忌後の如く御出へ但し、月番・山役は随侍なし。今夕、都鄙参詣の道俗、本堂の通夜申し上る事。

廿五日・施行米十俵、悲田寺の者共罷り越し、これを取り計う。大庫裏の内庭において一汁三菜の夕飯、并に米一斗五升を下さる事。

【行事一覽】

〔十八日〕□御忌中、方丈養生の薬を用意 □御忌法会の届 □松

平山城守（伊予松山藩主）先祖霊前三膳、御忌中供える □御

忌中風呂の張り札 □池の坊立花に登山 □愛宕護符の諸堂配

布 □方丈拝見停止等の張り札 □「御忌開闢式」大鐘四十

八・開闢の御祝儀 □集会堂本尊前に文殊像を安置、上段に善

導曼荼羅を掛ける

〔十九日〕□晨朝勤行、大鐘二十五 引声念仏、御斎会 □一心院

御斎 □惣集会大鐘三十五・導師登山 □遠州門中惣代登山

□楽人登山 □下雑色入来 □日中法事式 □初夜法事式 大

鐘二十五

〔廿日〕□大鐘、晨朝勤行 □大方丈御斎会 □日中集会の大鐘・

日中法事式等 □初讃導師祝儀・茶礼 □門主、御聴聞に御成

り □台徳院（二代将軍秀忠）御斎触れ □京都・大坂・田舎

好身中へ料理の仕度、廻し文

〔廿一日〕□大鐘、晨朝勤行 □日中法事 □大坂今宮講登山 □

初夜勤行双番念仏 道俗へ御十念 □説法当番寺院の拝礼、御

十念

〔廿二日〕□晨朝、導師拝礼等 □雑色入来 □門主参堂の式 □

御好身中へ料理 □中日御祝儀 □安土浄厳院年礼登山 □役

者、方丈へ御忌中御機嫌窺い □丈内所化、中日御祝儀

〔廿三日〕□晨朝、導師拝礼等 □勢至堂本尊開帳、惣門中・大衆

中参詣 □信州川中島法蔵寺御忌講登山 □明日、所司代・武

家方参詣の仕度 □大方丈莊嚴 台徳院宮（権現堂）供え餅

□大坂池田講炭献上 □大方丈御逮夜

〔廿四日〕□晨朝・日中法事等 □台徳院（将軍秀忠）祥月命日

大方丈御斎会、大鐘 □所司代参詣 □糸割符年寄入来 □門

中御斎 □清水坂物吉来る □錫杖の色袈裟 □宿忌説法、大

鐘 □伝供盛物 □参詣の道俗通夜 □夜食

〔廿五日〕□伝供集会の大鐘百八・伝供法会式 □集会堂に転衣御

影をかける □御斎会の大鐘二十 □御廟参詣 □日中集会の大鐘 歴代伝衣の御袈裟 □日中法事式 四箇声明 □当日導師拝礼 □御回向の祝儀 □二条三所へ法事終わる届 □施行米、悲田寺登山 □夜番の火の用心 □周萱忌（二十二世珠琳）御靈膳

二十六日から晦日（三十日）

この期間の主要行事は、二十七日に記載する知恩院江戸年頭使¹⁵と次に紹介する知恩院住職の年頭の参内である。

一、参内の仕度

勅願祈禱の巻数并に梅枝・下被位・末広等を認め、御進物等吟味の事。御参内御廻り書を認め、役所より差し上げる事。西院村・九条村へ、素襖十人詰めるように下納所より申し遣わす事。

一、宿坊へ御膳具・赤飯等

御参内日、御宿坊長徳寺迄、赤飯・餅米三斗五升・常米一斗・小豆一斗五升・煮染・豆腐三十丁・こんにやく五十丁・胡麻塩一升五合・香のもの・酒三斗を差し遣わす事。

赤飯の御初穂は大師前・鎮守へ供え、尊前へも差し上げ、方丈内は残らず、代官・下納所へも重箱にて配る事。また、御宿坊へ尊前の御膳具、并に御飯等の用意、持参の事。

一、参内の供廻り

御参内当日、御供廻り。奴五人・徒士八人・陸尺八人・中小姓四人。行者兩人・先番一人、御草履取り・朱笠兩人・挟箱兩人。

次の供兩人、次の挟箱一人、行者供一人、笠籠五人、押兩人、伴僧供一人、装束長持兩人、献上長持兩人充四人。赤飯・煮染の長持三人、御膳具長持兩人、五人前弁当持兩人、長柄持四人、参内の笠持一人。

月番・山役の陸尺十二人、侍三人、同供九人。良正院は陸尺四人、侍一人、供三人。下納所一人、両門番二人、御膳方・上納所共に三人、枕藏一人、万屋仁右衛門、酒屋、御進物は別記の如き事。

一、参内の前日

御参内前日、伺いのため行者参上。伝奏方、御附武家へも届け、時の伝奏に承り合う。尤も御輿等は長徳寺迄、前日に遣し置く事。一、参内の当日（出駕・宿坊・参内装束・内侍所参内・堂上方巡廻）

御参内当日の御供、月番・山役兩院・良正院。御出駕の刻限は随時。宿坊長徳寺へ御入り（御直綴・御五条）。尤も、門前迄、長徳寺及び組中拝迎送なり。途中より行者一人、御局会所へ罷り越し、ただ今宿坊迄参着の旨を届ける。御宿坊長徳寺拝礼、御十念、目録・銀一枚下さる。寮舎拝礼、鳥目五百銅下さる。組中拝礼、御十念。

次に宿坊より、方丈に雑煮・吸物・御酒を差し上げ、御盃を下さる。御返盃申し上げ、御核奉る。寮舎へも流盃下さる。次に赤飯・御湯漬等を召し上げる（御給仕、色衣・五条、供僧兩人、先達て長徳寺へ参居る）。御休息の内、両役・その外御供へも、雑

煮・吸物・赤飯・酒を出す。惣供の面々へも、赤飯・酒を下さる。追付、御局より御案内のため、御銘々の御使者来たる。御口上は良正院が取次ぎ披露に及び、御対顔。重畳を下りなされ御対顔。御返答仰せ進らる。御次（の間）において、右御使者へ、雑煮・赤飯・吸物・御酒の饗応あり。月番・山役挨拶に及ぶ。帰られ候時、両役・良正院は玄関の上板敷迄、行者は敷台迄これを送る。追付、御参内。御装束（御道具衣・七条、念珠・座具なし、刺貫・蔑子）。公家門車寄せより御下乗。御門警護固の与力・同心へ御会釈。御門内より、御局方御家老が御案内申し上げ、清涼殿の縁より殿上へ成りなさる。

両役・伴僧は梅の間迄随侍（御任官の上は、虎の間にて御待合す。御任官なき時は、梅の間に御待合す）。献上の束本は、巻数と共に虎の間へ先達て行者持参し、非蔵人へ渡す。

御待合の内、御申次御出会い、御互に御挨拶あり。次に（御休息所へ御入り、両役共に。非蔵人罷り出、御酒・核等出る）。御拝畢つて、内侍所へ御参り、御鈴料鳥目五百銅は行者が持参。御鈴畢つて、御洗米を行者請取り、右頂戴する。

それより、女御の御所へ御出、御玄関にて仰せ置る。但し、この御門前において御七条を五条に召し替られる（供僧中は、これより罷り還る）。

それより、堂上方を御巡廻、二条殿・近衛殿・関白殿・宝鏡寺宮・入江御所・両伝奏・御附武家方・時の御申次を御廻礼。御局へは良正院が御使僧を務める。その外は山役が御使僧を務める。

尤も、御跡箱に小奉書一帖・美濃紙一帖を用意、持参申す事（御帰り、暮れに及ぶときは、弁当持ち帰り次第、御挑灯持ち遣わすべし）。

一、参内の返礼等

御局方御返礼の日限を承り合い、納所方へ用意、申し渡す事。御帰山以後、長徳寺并に寮舎、御目録の御礼・御機嫌伺いのため登山。役中・大衆中も御飲びのため登山の事。

一、御局方の御礼返し

御参内の翌日、行者に、非蔵人へ手紙差し添え青銅五十正充、持ち遣わす事。

御局方より、別日に、御礼返しに御使者が登山。御荷桶（一充）・昆布（一台充）・こんにやく（一台ツ）、御銘々より、右の通り豎目録を添え来たる。良正院が取次ぎ、御対面所において重畳を下りなされ御対顔。良正院目録を披露、即御直答。

梅の間において雑煮・吸物・御酒・一汁五菜の御料理・吸物・御核種々。後段は蕎麦切・口取・濃茶等を出す。良正院相伴し、月番・山役は挨拶に及ぶ。退出の時、月番は手水場迄、山役・良正院は集会堂衝立迄、行者は敷台迄送る。玄関にて装束を着替えられるなり。

右、供の者共へも、小庫裏中の間にて、雑煮・一汁三菜の料理を出す。但し、近來は、山役が披露并に相伴等取り計いの事。

一、御礼返しに進物

御局方よりの御礼返しに翌日、良正院を以て仰せ進られる御進

物、荷桶（一充）・昆布（一台ツ）、干菓子（五袋充）。右、御局方御銘々に進られる。和紙三束ツ、〈粉に乗せる〉。御局方年寄三人へ扇子三本入り（二箱ツ、台に乗せる）。右、同所侍三人へ銘々遣わさる。尤も、会所において吸物・御酒・核種々、御局方御銘々より下さる。是を以て近來は、山役の年番が御使僧を勤める事。

【行事一覽】

〔廿六日〕□周警忌 □年頭参内の伺い □青山伯耆守（丹波亀山藩主）参詣 □御忌の後始末 □参内の宿坊、長徳寺へ依頼

〔廿七日〕〔一〕知恩院江戸年頭使 □二条三所 江戸年頭使の届

□御門主へ暇乞い □方丈、年頭使へ御料理 □年頭使への渡し物 〔二〕知恩院年頭の参内 □参内の仕度 □宿坊長徳寺へ

御膳具・赤飯等 □参内の供廻り □参内の前日 □参内の当日

出駕・宿坊・御参内の装束・内侍所参内・堂上方を巡廻

□参内の返礼等・御局方の御礼返し・御礼返しの進物 □伝供

講惣代御機嫌窺い登山

〔廿八日〕□式日勤行（本堂 集会堂 大方丈勤行） □大垣円通

寺年礼登山

〔廿九日〕□明日、御所司参詣の有無 □八十宮方代拝

〔晦日〕□有章院（七代將軍家継）命日 大方丈勤行 □武家方参

詣 □役中登山

第二 『年中行事録 坤』

―二月から十二月の行事―

二月

今月は初午、涅槃会、春彼岸を迎える。初午には、山上の稲荷（勢至堂墓地の北の端、濡髪（の）に供え物をする。「御供物、小豆飯・酢和会（あえ）・白豆腐・青和会・汁・干し大根・お供餅、白三方にて供えること」（朔日）。彼岸の勤行は、初・中・後の三日、方丈の出座、一山出仕の本堂勤行がある。盛り物、団子を供える（廿五日）。

六日は、寛文六年（一六六六）二月六日に逝去（七十歳）した千姫（天樹院）の向月（祥月命日）法要がある。幕府の要請により伝通院での葬儀導師は、知恩院三十七世玄譽知鑑が勤めた。知恩院にも分骨され勢至堂墓地に千姫供養塔が建立された。

十四日、未の半刻に鳴鐘、本堂において涅槃会御逮夜法要が始まる。御盛り物は餅饅頭三十充、涅槃像を大師前に掛け、西仏壇には曼荼羅を掛ける。方丈出座、一山出勤し、阿弥陀經・釈迦宝号七返・十方恒沙仏の文・念仏一会がある。方丈退出のあと、集会堂に曼荼羅をかけ、素麵（素麵とも）二百目の盛り物をする。

三月の冒頭に、「朔日・八日・十四日・十五日・二十日・二十四日・二十五日・二十八日・晦日。右、御命日・式日等の訳は毎月同様、先月の如き故、次下にはこれを略す。尤も相違の事ある日はその処において委しく記し置き候事」と記載している。

朔日・十五日・二十五日・二十八日の四日が式日勤行。命日勤行と

は將軍の命日の法要のことで、宝曆八年迄の命日法要は、八日（四代家綱）、十日（五代綱吉）、十四日（六代家宣）、二十日（三代家光）、二十四日（二代秀忠）、晦日（七代家継）の法要である。¹⁶

式日の十五日には涅槃会法要がある。二十五日には京都門中による法然上人御報謝説法があり、参詣者の道俗には、方丈より御十念授与がある。

【行事一覽】

「朔日」式日勤行 卯刻に鳴鐘。

・「本堂（大師前）勤行」尊前昇堂し、大机の香炉へ捻香・お箸をお供え（当番僧にお渡し）。御三拝、肩屏前に着座。大衆一同、三分一誦經・〈神力演大光の文〉・四誓偈・〈神力演大光の文〉・同一卷・〈十方恒沙仏の文〉・四奉請・阿弥陀經・〈自信教人信の文〉・念仏一会、御十念。

畢つて、尊前に大衆一同拝礼、御十念。次に一心院・入信院、一心院衆中・勢至堂道心者（行者が披露）、各拝礼、御十念。次に東西の脇仏壇（東仏壇には満誉尊照・雄誉靈巖像を安置）（西仏壇には家康母徳泰院坐像、家康・秀忠束帯像を安置）を御拝。畢つて、御下堂。

・次に「集会堂」本尊前、文殊前御拝。

・次に「大方丈勤行」（歴代將軍の位牌）。四奉請・四誓偈・〈十方恒沙仏の文〉・念仏一会、御十念。御退出。

・「御対面所祝儀」役所月番拝礼、次に良正院・大衆・役者・各庵拝礼。次に丈内、次に代官・下納所。次に玄閑侍中。次に中小姓・右

筆が御礼申し上げ、御十念を頂戴。「大茶堂」において、右の銘々は寮主・内役中へ祝儀を申し述べる。また、役所へも伺候する。

・右、終わると寮主始め丈内所化衆、祝儀のため役所へ伺候。この日、役中登山、御居間において拝礼あり。

【項目】

□檀縁大名方より年礼書帖が追々来る。披露の上、返簡。□御忌御用につき、池の坊に銀二枚・楽頭多讃岐守二百疋・楽人中に銀十枚、雑色荻野十郎右衛門に金一両、下役兩人に金一両等遣わす。□例年、安芸天満屋助右衛門より枝柿一箱献上。□一条殿より年始返礼。

□御殿の関東年頭使、暇乞いに登山。

「六日」天樹院（千姫）向月

・天樹院殿御向月。御靈膳二汁五菜。大方丈へ供える。道心者案内次第に茶堂当番が出勤、四奉請・四誓偈・念仏一会を勤める。尤も、尊前御参堂、帰りがけに御膳供養。

「八日」厳有院（四代將軍家綱、葬地寛永寺）命日大方丈御齋会
・大方丈御齋会。道心者案内次第、茶堂当番の僧一人出勤。四奉請・四誓偈・念仏一会を勤める。尤も、尊前御参堂の節、御靈膳供養。

「十日」常憲院（五代將軍綱吉、葬地寛永寺）命日（八日の如し）。

「十三日」明十四日の所司代参詣の有無、彼用人中より案内の手紙が来る。返書文言は先月二日の処に記し置く。

「十四日」文昭院（六代將軍家宣）命日、武家方参詣。涅槃会逮夜。
・卯刻鳴鐘。大方丈勤行。尊前御出座。御焼香・御三拝、御膝付き御着坐。大衆一同に四奉請・四誓偈二卷・念仏一会、御十念。

・所司代・東西両町奉行・二条大番頭衆・御附（禁裏）武家方・御目付衆。参詣の節、尊前出座し挨拶の上、手水場迄見送り。尤も所司代へは、送迎共、手水場迄の事。この日は役中登山。尤も御所司御帰り後、お歓びのため居間へ参上の事。

〔十五日〕式日勤行・涅槃会

・卯刻鳴鐘。本堂（大師前）勤行。尊前御出座。一山出勤。誦經三分一・〈神力演大光の文〉・四奉請・阿弥陀経・〈自信教人信の文〉。
〔涅槃会法要〕阿弥陀経・釈迦宝号七反・〈十方恒沙仏文〉・念仏一会、御十念、次に東西両仏壇御拝。

・次に阿弥陀堂御参詣。大衆一同、御法要。四奉請・四誓偈・〈弥陀本誓願文〉・念仏一会、御十念。

・次に鎮守御参詣。大衆一同四誓偈二卷・〈神力演大光の文〉。畢つて、御供物・造酒を各おの頂戴。

・次に集会堂御拝。次に大方丈。大衆一同、四奉請・四誓偈・〈十方恒沙仏の文〉・念仏一会。畢つて、御十念。

・次に対面所式日御礼等、朔日の通り。役中登山、御居間にて拝礼。

〔十七日〕東照宮（家康）命日

・卯刻鳴鐘。大方丈勤行。御霊前三汁七菜。尊前、例の如く出座。大衆出座。法要、四奉請・阿弥陀経・〈十方恒沙仏文〉・念仏一会。

・次に御影堂（権現堂）。四誓偈・〈神力演大光文〉・念仏一会、御十念。御退出の事。一山御斎。

〔廿日〕大猷院（三代將軍家光）命日

・大方丈御斎会、道心者案内次第、茶堂当番の僧一人出勤。四奉請・

四誓偈・念仏一会を勤める。尊前参堂の節、御霊膳供養。

〔廿四日〕台徳院（二代將軍秀忠）命日、本堂（法然上人）・中興満譽僧正御逮夜

・卯刻鳴鐘。大方丈勤行。尊前、例の如く出座。大衆出座。阿弥陀経・〈十方恒沙仏文〉・念仏一会、御十念。

・次に御影堂（権現堂）。四誓偈・〈十方恒沙仏文〉、御十念。一山御斎。
・申上刻、本堂御逮夜、尊前例の如く御出座、一山出仕。法要、阿弥陀経・中夜礼讃〈自信教人信の文〉、以上の句頭は当番僧。次に一山一騰句頭、阿弥陀経・〈処世界如虚空の文〉・念仏一会、御十念。

・次に東仏壇、満譽僧正前御逮夜。四奉請・四誓偈・〈自信教人信の文〉・念仏一会。

〔廿五日〕式日勤行・満譽僧正命日・勢至堂月次勤行

・卯刻鳴鐘。本堂勤行。尊前、例の如く御出座、一山出勤。三分一誦経・〈神力演大光の文〉。次に伽陀。次に舍利講式。次に舍利礼三反・釈迦宝号三反・〈十方恒文〉。次に阿弥陀経・〈処世界如虚空の文〉・念仏一会、御十念。

・次に東仏壇満譽僧正前。四奉請・四誓偈・〈自信教人信文〉・念仏一会。西仏壇御拝、御下堂。

・集会堂、例の如く御拝。大衆御廟に参る事。

・勢至堂月次勤行

・午刻、勢至堂月次御報謝説法あり。門中初讃已上、座次役勤める。説法の後、尊前（御五条にて）小方丈より裏通、山駕籠召され御出座。山内の一騰御先身（進）申し上げる。御焼香・三拝。高座

に御登り、三方道俗へ御十念下さる。

・次に山内の一臈御案内、両御所の間、門中へ御会釈。次に御廟にお参り、御焼香・御三拝。高座に御登り。同一臈句頭、四奉請・四誓偈・〈自信教人信の文〉・念仏一会、御十念。御退出。

・但し、今月はこれより〈御七条に召し替え〉阿弥陀経・如法念仏の席へ御出勤。尤も法要、畢つて、礼盤の上より施主の面々へ、御十念下さる。次で武家玄関より御入り。役中并に門中登山候事。

〔廿八日〕式日勤行

〔廿九日〕聖光上人御祥月

・東仏壇に画像をかけ、盛り物・御膳を供える。勤行は阿弥陀経・念仏。御影は宝藏より出し置く¹⁷。

・御所司、明日晦日参詣の有無（正月二日に記し置く）

〔晦日〕有章院（七代將軍家継）命日・武家方参詣（万事、十四日の如し）

三月

知恩院の五節句祝儀については、三日（上巳）節句に詳しく記載されているので、紹介しておく。

節句の勤行・御礼等は朔日の如し。一山御斎があり、香三菜・酒核。尤も、下々への渡酒あり。本堂・勢至堂道心者へも酒を出し、残る道心者へは渡酒。役所は朝夕共に五菜・吸い物・酒・核を出す事。

節句当日御祝儀として、尊前^{（方丈）}（御五條）は門主御殿に御出駕。伴僧は色衣・五条で兩人・中小姓二人・徒士二人・陸尺四人・挟箱一人・

草履取り・朱傘兩人。進物として干菓子一箱を持参。御対面の上、吸物・御酒の饗応がある。尤も、出駕少し前に、弟子中より一人参上し、当日御祝儀のため伺候の旨を申し入れ置く。且つ、出入りは共に、玄関式台迄御送迎申し上げる。但し、門主御入室なき時は、進物・饗応はなき事。

役中登山し、御殿へも伺候の事。大衆中・各庵・行者も御殿に参上、御礼を申し上げ着帳の事。京門中も御祝儀登山、御殿へも参上の事。

また、菱餅を供えること。大師前へは今朝大菱餅五枚。東西両仏壇に中菱三枚充。大方丈三ヶ処へ同二枚充。鎮守へ同三枚。阿弥陀堂・集会堂本尊前・文殊前へ同二枚充。御廟・勢至堂へ同二枚充。内仏壇・奥仏壇に同二枚つゝ、山神・秋葉・両稻荷・守夜神・大黒天・韋駄天に小菱二枚充。尊前には中菱二枚。役所へ小菱十六枚。御弟子中・大衆中へは二枚充。二百三十枚を引く、餅米およそ四斗程搗く事。今月は所司代を知恩院花見に招待している。十四日の参詣の節などに、御所司花見の饗応がある。小方丈において、二汁正七菜、口取・濃茶・蒸菓子・煎茶の料理。後段は山亭において饗応する。右は兼て両御奉行衆へも、御内々に仰せ進ぜられる事もあり。又、御参詣の砌に約諾の儀もあり。委細は御花見の記に掲載してある。

十三日は、本堂東仏壇において善導忌御逮夜勤行がある。方丈出座、大衆出仕。四奉請・四誓偈・〈十方恒沙仏の文〉・念仏一会、御十念。盛り物は餅饅頭三十充、納所方より渡す。外に餅百を山内より供える。明朝には三汁七菜の御膳を供える事。

四日に半季奉公人の入れ替えがある。前年の十一月十一日（御忌定

めの日）からの帽子着用を十四日の善導忌よりやめることを「開山大師の御帽子并に満誉僧正・雄誉上人・徳泰院殿、御花帽子取り奉る。尊前并に大衆中一同、今日より帽子相止め候事」と記載。下旬には、江戸参府の帰途のオランダ商館長・通詞一行の知恩院座敷拝見の訪問がある。⁽¹⁸⁾

【行事一覧】

〔三日〕 □節句（上巳）の祝儀 □方丈、御殿へ出駕 □菱餅を供える

〔四日〕 □半季の奉公人交替 □例年、江戸年頭使の役者帰京 □

この節、松平山城守（伊予松山藩主）より御忌野菜料 □大番頭衆・組頭衆より登山の申し入れ □所司代への知恩院花見の饗応

〔十三日〕 □善導忌逮夜

〔十四日〕 □善導忌 □開山大師・満誉僧正・雄誉上人・徳泰院の帽子をとる

〔十五日〕 □この節、安芸妙慶院門中御報謝 □この節、松平肥前守（平戸藩主）帰国の挨拶 □この節、酒井左衛門尉（出羽鶴岡藩主）年礼御祝儀

〔廿四日〕 □例年、大番頭衆参詣 □この節、阿蘭陀人参詣 □この節、松平相模守（伊予松山藩主）より年始御祝儀 □この節、五島宗念寺より甘海苔献上

〔晦日〕 □二条目付衆の参詣

四月

朔日は衣更えの日である。素裕・白衣にて勤行・御礼等に出仕する。八日の釈迦誕生日、灌仏会は全ての仏教寺院で行われる法会であるが、知恩院では、方丈が出座、大衆集会。大経（無量寿経）上巻半分・釈迦七反・〈十方恒沙仏の文〉・念仏一会。畢つて、御下堂。盛り物があり、産茶は、白檀一両・桂辛一両・甘草一両・甘茶半斤にて調え、仕立てる。

十六日入夏、今日より六月二十八日迄（一夏九旬の間）、本堂に惣出仕、阿弥陀経・日中礼讃・〈十方恒沙仏の文〉・念仏一会。方丈も毎日参堂。十七日は大檀那徳川家康の向月法要があり、所司代の御霊屋（権現堂）参詣がある。この季節、二条三所、門主御殿に筍を贈る。

【行事一覧】

〔朔日〕 □衣更え

〔四日〕 □法界施餓鬼 集会堂 □九条兼実向月

〔七日〕 □円常院御向月

〔八日〕 □灌仏会

〔十六日〕 □入夏、一夏九旬の勤行始まる

〔十七日〕 □東照宮御向月法要 □御所司参詣 □淀藩主稲葉丹後守参詣

〔廿四日〕 □交代の大番頭参詣 □例年、筍の進物

〔晦日〕 □有章院（七代將軍家継）向月 □所司代参詣 □武家方参詣

五月

五日の端午の節句には、本堂の大師（法然上人像）前に三汁九膳、西仏壇の徳泰院（伝通院）に二汁七菜の御膳を供える。本堂・大方丈勤行・御礼等は、朔日の如く勤める。役所では役中登山し、料理がでて、一山の御斎があり、下々には渡酒。方丈（尊前）や門中が門主御殿へ出かけるのは、三月の節句同様である。

十六日には、今年二度目の法然上人御影に宝祚延長を祈願する大師前勅願御祈禱がある。例年、正・五・九月の二十四日（秀忠月命日）は、所司代の参詣日となっている。

二十八日には、五代將軍綱吉の長男で五歳で亡くなった上野国館林藩主徳松（浄徳院）の向月法要がある。綱吉は徳松早世後は実子に恵まれず、甥の甲府藩主徳川綱豊（六代將軍家宣）を養子に迎えることになった。晦日（三十日）の夜には祇園御神輿洗いがあり、桜馬場へ挑灯三張を出す。六月十八日も同様にしている。

【行事一覧】

〔五日〕 □節句（端午）の祝儀 □大師前・徳泰院像へ御膳 □役

中、節句登山 方丈、門主御殿へ出駕

〔十六日〕 □大師前勅願御祈禱

〔廿四日〕 □所司代参詣

〔廿八日〕 □浄徳院（綱吉息徳松）向月

〔晦日〕 □祇園神輿洗い

六月

七日は、祇園神事つき本堂日中勤行はなく、この日役所は休日となる。例年、「入土用」の日には、方丈に土用餅・油の料理を差しあげる。また役者（六役・山役）より、方丈に御機嫌伺いのため索麺を献上する。「入土用」の翌日、方丈は関東御機嫌伺いのため二条三所へ出駕、帰りがけには青蓮院門主、門主御殿へ立ち寄られる。

二十二日には、三代將軍家光の側室で五代將軍綱吉の生母である桂昌院の向月法要がある。桂昌院は元禄九年（一六九六）八月、弟本庄宗資とともに、増上寺貞譽了也より五重相伝を受けている。その翌年の一月十八日、東山天皇の勅許により知恩院に贈大師号（円光大師）が贈られたが、知恩院四十七世白誉秀道は、將軍綱吉・桂昌院・本庄宗資に贈大師号を謝している¹⁹。

二十五日は中興満誉僧正向月であり、中興忌法要がある。一昼夜別事念仏があり、本日の法然上人御報謝説法は、勢至堂ではなく本堂であり、方丈より御十念授与がある。

土用中に虫干がある。宝蔵虫払い、「樟脳七百包余り（三斤）、経蔵へも同段（但し、半紙六切り、玄関侍及び茶の間僧に割り付け包ませる事）。経蔵虫払いは、大衆中・各庵・行者・代官・一心院・入信院・勢至堂の道心者まで総出し、中食を出す。経蔵へは錫酒二つ・奴豆腐一重、手ぼうき五本・しべ^{（胡粉）}ほうき五本・こふん^{（胡粉）}三兩を遣わす。宝蔵の節は、斎・非時がある。

二十八日に、四月十八日からの本堂における一夏九旬の勤行が終わると、陰暦六月晦日の祓え、水無月祓えがあり、月天子に御酒を供え

る。

【行事一覽】

〔七日〕□祇園神事 役所休日 □例年、膳所藩主本多主膳参詣

□入土用の祝儀 □方丈、関東御機嫌窺い、二条三所へ出駕

□入土用の見舞、贈答

〔廿二日〕□桂昌院殿（綱吉母）向月 □本堂煤取り *浄琳院殿

御法要（書込）

〔廿五日〕□満蒼僧正向月 □中興忌 本堂御報謝説法 □土用

の虫干し □二条目付衆の巡検

〔廿八日〕□一夏九旬の日中勤行終わる

〔晦日〕□水無月祓え 月天子へ御酒

七月

朔日には、行者が繪旨官持上納伺いのため勘定下書を作成して御局へ持参する。二日には、方丈内に勤める奉公人に給銀が渡され、施餓鬼の旗紙（青・黄・赤・白・黒百枚充）、幡板五枚を、行者より納所方に渡される。幡切りの日には、酒一錫・煮染めを本堂へ遣わす。

五日には、良正院（家康娘・督姫）・清泰院（督姫子・池田忠雄）の墓参がある。一汁五菜の御霊膳二膳（但し、高盛。揚げ豆腐・寒天・蒟蒻・葉人参・ずいき）。盛物は縁高に（饅頭・干菓子、小半斤）。御両方分として、蠟燭一丁・油少し、奠茶・奠湯の土器小、水向桶等御廟所に遣わす。大衆中登山。方丈は車寄せより山駕籠を召され登山。御霊供・御供養、終わると施餓鬼、四奉請・阿弥陀経・念仏一会。但

し、雨天の節は本堂東仏壇において、山の方を開けて法事をする。

官銀掛け日には、行者・右筆・両替屋菊屋手代に柳の間において、朝夕一汁五菜の料理と酒核を出す。昼時分には煮染・酒を菊の間へ出す。銀包紙上葛紙百枚半紙は納所方より遣わす。

七夕御祝儀として、御内証より江戸宿坊に七夕御祝儀目録、増上寺所化役兩人には金二百疋充、寮主より仰せ状を差し添え遣わされる。御医者方に銀二枚充、内役より書状差し添え、足輕使いにて遣わされる。節句当日の祝儀、勤行は五月の節句同様である。

また、高野槇を調達し（代物五百文）、集會堂道心者が本堂・大方丈・集會堂・御内仏等に配る。七日に本堂において惣施餓鬼の法要、九日に本堂西仏壇において東照宮御施餓鬼、十一日に歴代住職御廟参がある。十三日に有章院、十四日に文昭院の施餓鬼があつたが、宝暦七年（一七五七）より歴代將軍の施餓鬼（九・十一・十四日）に代わり、本堂の徳泰院・家康・秀忠三尊影前で一会、次に大方丈御仏前における一会執行となる旨の記載がある。十五日の三門施餓鬼には三方道俗へ、方丈より御十念が授与される。

二十四日の石橋町地藏会には、納所方より青銅百文・白米一升が遣わされる。この節には、大坂今宮講中が登山、干瓢を献上、御十念、一汁三菜の非時を頂いている。二十五日の本堂勤行には「鏡の御影」を掛けての説法があり、方丈の御十念授与、その後、勝手次第、御廟へ参詣する。

【行事一覽】

〔朔日〕□繪旨官物上納

〔二日〕□奉公人へ給銀 □盆施餓鬼の幡紙・幡板の準備

〔五日〕□良正院・清泰院墓参 □官銀掛け 菊屋 □松平相模守

(鳥取藩主) より良正院殿水向料 □七夕御祝儀 □医者方へ七夕御祝儀

〔七日〕□節句(七夕) □方丈、御殿へ出駕 □方丈より索麵・

吸物・御酒 □八十宮方より水向料

〔九日〕□東照宮御施餓鬼 □諸堂に高野槇を配る

〔十日〕□歴代住職の卒塔婆経木を墓所に立てる

〔十一日〕□歴代住職の御墓参 □今日より十四日迄、役所休日の事 □門前惣掃除

〔十二日〕□諸堂に素麵供える

〔十三日〕□本堂西仏壇施餓鬼 □武家方参詣 明日・明後日 □

宝暦七年より施餓鬼に代わる一会

〔十四日〕□文昭院(家宣)施餓鬼 □武家方参詣 □所司代参詣

□本堂御逮夜 □大番衆の参詣

〔十五日〕□大師前・徳泰院(家康母、伝通院)・両上人(満誉・雄誉)前、御膳 □三門施餓鬼 □京都門中集会

〔十六日〕□役所休日

〔十七日〕□一心院開山称誉上人向月

〔廿二日〕□石橋町地藏会へ遣し物

〔廿五日〕□入藏、鏡御影を掛けての本堂説法 □八朔の祝儀 門主御殿・二条三所へ使僧 □この節、今宮講登山、干瓢献上

八月

八朔とは八月一日のことで、正月・盆とならぶ節日である。八朔御祝儀としては、香衣使僧をもつて門主・二条三所へ索麵を贈る。当日祝儀として、方丈の御殿への出駕があった。

放生会は捕らえた魚・鳥等の生き物を山野池水に放つ、不殺生戒に由来する行事で各地の寺社でも営まれている。十五日の鎮守社放生会では、四つ時、方丈が鎮守社に出座、伴僧(色衣・五条)、中小姓兩人・侍四人・陸尺四人、日傘・御草履取り二人。大衆出仕、拝殿東の方に御簾をかけ、阿弥陀仏の画像を掛ける。香花・灯明、餅饅頭三十充供える。方丈は、御焼香了って始終西向きに御着座、法要がある。

十五日には月見の祝儀があり、塩煮芋三斗を処々へ供える。月天子への御酒一対・芋を大方丈において供える。御対面所での御勤めの後、阿弥陀経一卷・(月天子、神力演大光の文)。茶の間詰めの後、大茶堂において中小姓已上に御祝儀の御酒がある。

二十九日の徳泰院の御向月法要は、四奉請・阿弥陀経・(十方恒沙仏の文)・念仏一会、御靈膳は三汁九菜である。

【行事一覧】

〔朔日〕□大師前・徳泰院(家康母、伝通院)・両上人(満誉・雄誉)前、御膳 □方丈、門主へ八朔御祝儀の出駕

〔四日〕□了鑑大僧正(四十六世然誉)供養

〔十五日〕□鎮守社放生会 □月見の祝儀 □今月、彼岸 □宗旨改め帳面

〔廿五日〕□勢至堂御報謝 □阿弥陀堂如法念仏

〔廿九日〕□德泰院向月

九月

朔日には三十二世雄譽靈巖の向月法要がある。九日の重陽の節句前後には、門主御殿・二条三所等に香衣御使僧をもつて松茸を贈る。また、山上への松茸狩りの案内をする。節句の当日御祝儀として、方丈の門主御殿出駕がある。栗一斗三升を塩煮にして、諸堂へ十五充供え、方丈内・役所・大衆等へも配る。

十三日の月見には、諸堂に枝豆、月天子には白三方に枝豆・栗・芋・御神酒一対を大方丈において供える。勤行等は八月の月見と同様にする。十四日の粟田口天王祭には、方丈の代参は色衣・五条、初穂料は鳥目五百文、天王社からは御札授与がある。

十六日に門主・所司代等の松茸狩り登山についての、次の記事を載せる。

・御門主并に御所司・両御奉行、当月松茸かりに御出候よう仰せ入れられる。委細別記あり。青門様山廻りへ、当山廻りより達す。

御門主御成の時は、御料理三汁八菜。御次に二汁五菜并に後段、外様二汁香五菜。下々へは差し構えなし。山上へ床机二脚・四本柱・同覆い障子二枚・薄縁・毛氈・御茶具。御次の茶具・薄縁等設ける。

・御所司・両御奉行衆御出の時は、御通りの上、裏附袴に召し替えらる（広蓋を設置）。御料理二汁五菜、山亭にて後段。但し、小方丈上段には梅の掛け物、中段には御刀掛け、下段には花鳥の二幅対、白

壺花生けに菊花を生る。縁通りに毛氈を敷く。山亭の掛け物は舜拳の山水、床柱に花生けを掛け、水仙・山茶花・菊などを生る。

御刀掛け・紫の紋幕・日覆い。縁通りに毛氈を敷く。看守部屋は中井休息所に氈を敷き設置。尊前御休息所も、屏風・氈・半畳等置く。墓所の手前并に茶所の向い・勝手の向い通りには布幕を張る。

山上床机二脚・御紋の幕。御次の床机二脚・茶・弁当・御酒并に杉折二重。但し一重は蒸し菓子、一重は取り合わせの煮染、或いは提重など持参する。御次に餅・酒・煮染・茶を送る。

松茸が少い時は、御出の朝、植え置く。松茸籠は二つ用意、山上へ持参する。御所司御帰り後、御使僧を進じる。尤も、御手土産ながら干菓子小重、三重に詰め、その外、くはうるいなど、時の思召し付にて御饗応の内に遣わされる時は、右御使僧持参する。猶又、直に御自ら手取り成された茸は、青竹皮の籠に入れ遣わされる事もある。両奉行衆へは御取り持ちの御挨拶のため御使僧を遣わされるなり。且つ、御所司御子息方・両御奉行衆御内証方杯仰せ入れられる事もあり。随時不定の事。

〔行事一覽〕

〔朔日〕□靈巖上人向月 □松茸の進物

〔九日〕□節句（重陽） □方丈、門主御殿へ出駕

〔十三日〕□月見の法要・祝儀

〔十四日〕□清揚院（綱重、六代将軍家宣父）向月 □栗田口天王

祭初穂

〔十五日〕□崇源院（秀忠室・お江）御祥月

〔十六日〕□大師前勅願御祈禱 □当月、松茸狩り 門主・所司代

等登山 □今月、御忌初讀・当日導師の内意

〔廿四日〕□所司代参詣

〔廿六日〕□宗旨帳面・証文、奉行所へ持参

十月

今月は知恩院支配の浄土寺村・西院村・九条村の年貢納入の月であり、納所より村の庄屋・年寄宛て、霜月中に皆済すべき年貢納日書付の申渡しがある。十五日には、一山あい寄り、ご祈禱の日待ちをし百万遍念仏を修行する。翌朝には茄子に穴を開け、日天子を奉拝する。

十五日・今晚、山内において、御祈禱の日待あり。尤も、十七ヶ院巡番に当舎を務める。大衆・行者・各庵・代官等あい寄り、百万遍念仏修行。畢つて夜中に祝儀あり。翌十六日朝、茄子に穴を開け、日天子奉拝。護念経読誦。御供物・御酒各頂戴候事。

【行事一覧】

〔十四日〕□文昭院（六代將軍家宣）向月（祥月命日） □所司代参

詣 □今月、西院村・九条村藏付け □西院村・九条村年貢納

日の書付

〔十五日〕□十夜 □阿弥陀堂 懺法修行 □山内、祈禱の日待ち

百万遍念仏

〔十六日〕□日天子奉拝 □下旬、川筋普請の高掛かり

十一月

季節の祭礼として、七日に山の神、八日に稲荷お火焚きがあり、山の神には御神酒・煮染め一重・小豆餅百、稲荷には御神酒・小豆飯・白豆腐を供える。十五日の鎮守お火焚き法要は盛大に行われた。⁽²⁰⁾

十一日に御忌唱導師を任命する「御忌定」が、大方丈松の間においてある。この日より、本堂の大師（法然上人）像、満誉上人・靈巖上人像、徳泰院（伝通院）像に花帽子をかぶせ、一山においても着用する。また、例年、二月晦日まで火鉢を出す。方丈は、入寒の祝儀、関東御機嫌伺いのため二条三所に出駕する。

【行事一覧】

〔七日〕□山神祭礼

〔八日〕□稲荷お火焚き □今月、諸堂ひじり行灯の張替

〔九日〕□御忌定の茶菓子 亀屋・鯛屋 □膳所縁心寺より歳末御

祝儀

〔十日〕□入藏、五祖の御影

〔十一日〕□今日より火鉢 □御忌定め □大師・両上人（満誉・

雄誉）・徳泰院像に帽子 □五祖の御影 □御忌声明方の申付け

□今月、香の物、大根一万八千本漬ける

〔十五日〕□鎮守お火焚き □来春の江戸進物、松茸漬 □入寒の

祝儀 □方丈、関東御機嫌窺い出駕 □伊勢内宮より大麻

〔廿五日〕□明年年頭使の内意

十二月

一年の最後の月として、檀信徒が参詣する歳末の行事として仏名会（六日・八日）、御身拭い式（廿日）、勢至堂御報謝説法がある（廿五日）⁽²¹⁾。十二月の勢至堂御報謝説法は京都門中ではなく一心院が担当していた。一心院は知恩院が無住の時、御身拭い式も勤めていた。御身拭い式がすむと、方丈は歳暮の祝儀として二条三所に出駕、帰りに門主御殿に立ち寄るのを恒例とした。二十四日の將軍秀忠の月命日には、所司代・両町奉行の参詣があつた。

上旬に御局への編旨官物の上納、祠堂銀勘定仕立帳面への方丈の奥印、方丈からの役米下賜があつた。

新しい年をむかえる準備と、御忌の仕度は十日頃より始まる。煤払い・餅つきがあり、愛宕山に代参した。役所は二十六日より休日となるが、大晦日には吉水を汲み、節分には豆がまかれている。

大晦日・節分、本堂勤行、豆打ち

・節分。本堂勤行。尊前御出座、大衆出仕。四誓偈二卷・（神力演大光の文）、御十念等。畢つて行者一臈豆を打ち廻る。尊前御頂戴。大衆等また頂戴の事。

・御内証御年男、下納所の筆頭、例格これを勤む。尤も奥茶堂において、行者一臈、御内証御年男へ扇子二本入り一箱・鳥目五百銅充、寮主応対下さる。次に納所寮において吸物・御酒下さる。但し、御内証御年男へ、即ち御煤取りの節、御居間等へ出入り候事。

【行事一覽】

〔上旬〕□伝供講中登山

〔二日〕□編旨官物上納

〔六日〕□仏名会、八日迄 □年貢銀納 □ひじり行灯 集会堂・廊下

〔十日〕□正月の準備 掃除道具

〔十一日〕□祠堂銀勘定仕立帳面に方丈奥印 □上下料下賜 □諸帳面の仕立て □正月用品の新調 □御忌入り用蠟燭 □表門の行灯、障子張替 □この節、門前年貢・役銀上納

〔十二日〕□源智上人御向月

〔十八日〕□小方丈煤払い

〔十九日〕□方丈内煤払い

〔廿日〕□大師御身拭い □今晚、山内祠堂勘定 □方丈、関東への歳暮祝儀のため二条三所へ出駕 □歳暮の進物

〔廿三日〕□役米下賜 □御忌伝供土器 □今日より百姓働七人

〔廿四日〕□愛宕山代参 □餅米洗い □所司代・両町奉行参詣

〔廿五日〕□餅つきの祝儀 □役中登山、歳暮の祝儀 □京都門中

登山 □勢至堂御報謝説法、一心院 □門前八町年寄、薯蕷献上 □西院村・九条村庄屋・年寄、頭いも献上 □歳暮の御祝儀、門主御殿・増上寺・江戸宿坊・医者方等

〔廿六日〕□今日より、役所休日

〔廿八日〕□式日勤行 □餅飾り □諸方御供え

〔大晦日〕□二条大番頭衆参詣 □夕節 □歳暮の祝儀、御殿参上

□本堂御逮夜 □今夕、吉水汲み □今晚、御内祝儀 □節分、夕節、一山非時 □節分、本堂勤行、豆打ち

末尾に「宝暦八戊寅年七月」の奥書。

[注]

- (1) 今堀太逸『浄土宗の展開と総本山知恩院』（法蔵館、二〇一八年）第三部第二章「徳川家康の知恩院造営」参照。
- (2) 『大日本仏教全書』第一一七卷寺誌叢書第一、『知恩院史料集』古記録篇二（総本山知恩院史料編纂所、二〇一六年）所収。
- (3) 『日鑑』元文二年（一七三七）閏十一月十日・十一日参照。
- (4) 『玉桂寺阿弥陀如来立像胎内文書調査報告書』（玉桂寺、一九八一年）伊藤唯真『聖仏教史の研究 上』第四編「念仏教団の諸相」（伊藤唯真著作集Ⅰ、法蔵館、一九九五年）参照。
- (5) 今堀前掲書（1）第一部第一章「東大寺再興の念仏勧進と『選択集』」。
- (6) 『古寺巡礼京都19知恩院』『知恩院の歴史と信仰』（淡交社、一九五七年）。
- (7) 今堀前掲書（1）第四部第二章「知恩院役所の勤め方―六役と山役―」。
- (8) 底本は原本ではなく役所で使用されていた近世末期の写本である。成立は、記載内容からも宝暦八年との成立が確かめられるが、本文中にその後の変更した書き込みがあるほか、それ以後の出来事が本文となっている箇所もある。底本は『知恩院史料集 古記録篇二』（総本山知恩院史料編纂所、二〇〇六年）に翻刻されている。本稿では、内容をわかりやすくするために、漢字の旧字体は新字体に、正・略・異体などの文字も現今通用の字体に改めた。また、漢字表記の代名詞などは、一部平仮名に改め、漢字送り仮名の過不足は一定の範囲内で統一した。
- (9) 『知恩院史料集』『日鑑・書翰篇』『日鑑篇』（総本山知恩院史料編纂所）刊行目録。『知恩院史料集 日鑑・書翰篇一』（一九七四年三月一日「開宗八百年記念出版」）に「日鑑」元禄二年・三年・四年・四年（浄書抜粹本）・五年・七年を収録。以下（②）以下、収録の巻数。「日鑑」元禄九年・十一年・十二年・十三年・十四年（「日鑑・書翰篇」②）。

元禄十六年・十七年・宝永二年・三年（③）、宝永六・七・八（正徳元）年は未収録。宝永五年・正徳二年（④）。「日鑑」正徳三年・四年・五年（⑤）。正徳六（享保元）年・享保二年（⑥）。享保三年・四年（⑦）。享保五年・六年・七年（⑧）。享保八年・九年（⑨）。享保十年・十一年（⑩）。享保十二年・十三年（七月～十二月）・十四年（⑪）。享保十五年（⑫）。享保十六年・十七年（⑬）。享保十八年・十九年（七月～十二月）（⑭）。享保二十年（⑮）。元文元年（⑯）。元文二年・三年（⑰）。元文四年・五年（⑱）。元文六年（⑲）。寛保二年・三年（⑳）。以下「日鑑篇」。寛保四（延享元）年・二年（㉑）。延享三年・四年・五（寛延元）年（㉒）。寛延二年・三年・四（宝暦元）年（㉓）。宝暦二年・三年・四年（㉔）。宝暦五年・六年・七年（㉕）。宝暦八年・九年・十年（㉖）。宝暦十一年・十二年（㉗）。宝暦十三年・宝暦十四（明和元）年（㉘）。明和二年・三年（㉙）。明和四年・五年（㉚）。明和六年・七年（㉛）。明和八年・九年（㉜）。安永二年・三年（㉝）、二〇二年刊行予定。

- (10) 山西泰生「知恩院「韋駄天立像」が見た正月二日」（『佛敎大学 宗教文化ミュージアム研究紀要』第五号、二〇〇八年）。知恩院の贈答については、工藤美和子「知恩院からの贈り物」（『教化リサーチ』第二四号、佛敎大学浄土宗文献室、二〇〇七年）。季節の贈答を紹介しながら、その意味（宗教性）を考察している。
- (11) 別冊太陽『京の歳時記 今むかし』（平凡社、二〇〇六年）。
- (12) 「二日」□武家方の参詣について

・参詣の遠見。今日より武家方惣参詣が済む迄、遠見を出し置く事。
・尊前御装・応対・饗応。武家方参詣の節は、尊前装束（直綴五条）で御応対、挨拶が済むと一旦菊の間へ御入り（たはこ盆を奉る）。その内に御饗応あり。右、畢つて、御暇乞いに出座。御見送りは手水場迄。或は又、饗応後、応対ある儀もあり。
・御料理の用意。武家方参詣の節、惣て雑煮・吸物・酒・核三種あるに付き、残らず参詣済む迄は、毎日その用意を申し付け置く。
□御所司参詣の案内 文面等

御所司御参詣の節は、前日御案内の手紙、彼の役人中より来たる。即、返書に及ぶ。諸向き参詣の示し合せ、山内掃除、別して入念に申付ける。役中（六役・山役）は登山。遠見は三条大橋迄格別に出し置く。

一、御所司用人中よりの御案内の文言、左の如し。
明何日五半時出宅にて、備後守被致参詣候、例之通御心得可有之候、以上、

正月何日

切封にて

知恩院役者中

用人衆五人列名

一、右返簡の文言、左の如し。

備後守様、明何日何時御出宅にて、被遊御参詣候之旨、御紙面之趣致承知候、以上、

正月何日

裁封にて

用人衆五人之列名様

知恩院役者

右の通り往復文言、月（参り）并に御参詣同様の事。

一、御所司、月并に御参詣、御用或は御不快にて御参詣なき時、御案内の文言は、左の如し。

今日者、備後守御用有之、御仏参被致延引候、其旨、御心得可有之候、以上、

一、右返簡文言は、左の如し。

備後守様、今日御用被致在候に付、御参詣不被遊候旨、御紙面之趣致承知候、以上、

一、御所司参詣の剋限、暁六ツ半、或は五ツ時出宅と案内ある節は、その旨、役中へ廻文を差し出す。文言は左の如し。

御所司、明何日五ツ時御参詣之旨申来候、右為御知、如斯御座候、以上、

右裁封、状箱に入、

月番

□御所司参詣 出迎え 饗応

一、御所司御参詣の節は、山役帳場敷台迄、役中は同畳下板間迄出迎える。尊前御装束（純色上袴、或は道具衣。但し五条）、集会堂

西の方、中の柱二本目の内迄御出迎え（尤も、兼てその用意申し上げ、暫く待請け遊ばされる程が宜ろし）。

それより本堂、権現様（家康）・台徳院様（秀忠）御影前へ御案内。尊前は尊影前の柱際に御扣え。次に大方丈御仏殿へ案内（但し、尊牌前御代々、残らず扉開け蠟燭を立てる。水引等荘厳は、旧冬廿八・九日頃より厳（かざ）り置く）。

御拝、畢つて、御霊屋へ案内（但し、御供え・蠟燭等設置）、各の御拝。次に小方丈へ御案内。御着座。追付、羅漢の間において御装束を召し替えられる（広蓋、兼て設置）。長袴にて御復座。

次に尊前御挨拶。最初に関東御機嫌御伺い遊ばされる。次に先刻、御使者を以て御年玉参り候御挨拶。畢つて、引渡（ひきわたし）を尊前へ役中持参。御口祝い、昆布御手自ら進められる。御薄茶、次にたば粉盆。次に雑煮・吸物・酒・核等出る。

但し、近年は尊前御相伴なく、御盃事は、御所司御取り上げ尊前へ進められる。次に御返盆。御互に御核進められ、重ねて御納めに尊前へ進められる。次に御料理、二汁七菜、吸物・酒・核・口取・濃茶・蒸菓子・煎茶等。

饗応、畢つて、御見送りは手水場迄例の如し。但し、御用達（ようたし）として中井主水・三輪市十郎の内、一人入来。花鳥の間において料理・菓子等を出す事。

□武家方香奠

一、武家方御参詣、香典。

・御所司は、東照宮御影前へ太刀一腰・馬代銀一枚。台徳院殿・文昭院殿・有章院殿へ各の銀一枚を献ぜられる。

・両御奉行は金二百疋。大番頭衆は銀一枚充。御附武家衆は金百疋充。小堀仁右衛門は金百疋。その他、小役人方・御医者者は銀一包充。

・御用達の町人は金百疋、或は銀包・青銅等を献じる。

・高槻（藩主）銀三枚。淀（藩主）太刀・銀一枚。龜山（藩主）太刀・銀一枚。膳所（藩主）銀一枚。御目附金百疋。伏見（奉

行) 銀一枚。

右の通り来たり候事。

(13) [四日] 方丈名代の十九ヶ寺巡廻

一、御名代、卯の刻登山。菊の間において二汁五菜、吸物・御酒を下さる。相伴、山役一ヶ院、以上塗木具。伴僧・行者は次の間において猫足膳。但し、二汁は引落なり。月番・山役挨拶に及ぶ。

饗応、畢つて、御対面所において、下より横三疊目にて拝礼(装束、道具衣・九条、念珠・座具)。伴僧縁輪。一同拝礼・御十念。月番・山役、手水場迄見送り。明日御礼のため登山あるべく旨、山役より相達す。直に十九ヶ寺巡廻の事。

一、雨天の時は、行者四手駕籠申し付け候事。

一、御名代の昼食、五ツ時前、弁当割籠二十人前、酒三升、鳥目二百銅、宿坊西園寺迄持ち遣わし候事。

関東の檀林住職が知恩院住職として入寺するようになると、知恩院の京都門中との間で様々な規程が定められた。中井真孝『法然伝と浄土宗史の研究』(思文閣出版、一九九四年)の第二章「知恩院の京都門中について」、及び第三章「京都門中十九箇寺考」。今堀前掲書(1)参照。

なお、十九箇寺とは、報土寺・浄福寺・報恩寺・浄(上)善寺・西園寺・正定院・常林寺・専念寺・専称寺・信行寺・天性寺・大運院・浄教寺・勝円寺・法然寺・永養寺・本覚寺・上徳寺・西方寺。当時の所在地については『京羽二重』巻四参照。

(14) [九日] 方丈、二条表等年礼出駕

一、曉六ツ時前、尊前へ手水差し上げる。直に参堂。次に御膳差し上げる。六ツ半時、二条表御年礼のため御出駕。装束は素絹刺貫御五条。月番・山役が御供。御所司において下乗。下座は筵より間半程手前(但し、下座筵敷のある時は平付け)。横付け敷石迄、取次両人が罷り出(但し、用人中の案内もあり。待合いの間へ御通り、御口上仰せられる。追付、奥座敷において御所司御応対(御所司は北方に着座、尊前は南方に着座))。

御対談の内、一心院・良正院・六役・山役罷り出、御礼申し上げる。何れも、寺号手札を取次へ相渡す。即披露。御退出の時、杉戸際迄、御所司が御見送り。敷筵迄、用人・取次は罷り出る。それより、四軒屋敷へ御駕籠廻され、御門番衆・御殿番・小堀氏玄関迄、御駕籠を寄せらる。

それより、西御役所へ御出。下乗はちよつと草履召され候程に横付け。下座、筵へ取次が罷り出る。御対面の内、両役が御年礼申し述る。扇子三本入り一箱充、取次披露。右、畢つて御退出。送りは広間迄。それより東御役所へ御出、右同断。

御供のほか、役中はこの御門前にて御暇申し上げ、勝手次第歸寺する。御進物は別記、尤も、御昼食所へ金二百疋を下さる。

(15) [廿七日] 知恩院江戸年頭使

□二条三所 江戸年頭使の届

一、江戸御年頭使、此の節、二条御三所へ御届けのため伺候。両御奉行所へは、別記の如く手札相認め、当番へ渡し候事。

□御門主暇乞い

一、御年頭使、御門主へ御暇乞いのため参上。当番面談、金百疋下し置れ候事。

□年頭使へ御料理

一、御年頭使、御対面所において月番相伴にて、二汁五菜の御料理。口取・濃茶・干菓子・煎茶を下され候うえ、尊前御出座。御役人方への御書箱渡しなされ、縁山(増上寺)大僧正、并に役者への御口上仰せ渡される。次に前三後一、御十念。次に挟み昆布、御盃下さる。(内役御手長、中小姓御給仕)。御返盃申し上げ、御核奉る。次に銀三枚拝領。御暇申し上げ、退出。次に御弟子中より乗物包料金一兩・路金・雑用金、并に増上寺四役者へ御年玉金百疋充など請取る。次に伴僧・若党へ銀一枚充、草履取り・馬附き中間へ銀二十目充、請取り候事。

□年頭使へ渡し物

一、右、御使僧へ、御納戸并に納所方より渡し物、左の如し。

献上巻物、金入り中奉書一帖、小奉書二帖、美濃かみ二帖、中奉書半切、巻紙二巻、小奉書半切、巻紙三巻、墨一挺、筆二対、蠟燭二十目掛け三十挺。右は役所へ持参。

渋紙二枚、琉球二枚、細引、口とり、跡付一ツ、ふとん張一筋、ちきり五ツ、乗掛合羽一ツ、待合羽青添一ツ、仲間合羽赤一ツ、絵符五枚。右、帰京後、古き儘、納所方へ相戻し候事。

一、御年頭使へ、役中より銀三枚を送る。年頭使よりも、中間乗物包代金二百疋、役中へ渡し候事。

一、御年頭使へ、使僧を以て、寮主より銀二両・内役中より銀五匁充之を送り候事。

一、御使僧下向に付き、道中配符先触れ之を出す。下納所より大津問屋迄、持ち遣せ候事。

一、御年頭使出立、使僧を以て、発足の旨、当役所へ届け候事。

(16)『大本山増上寺史本文編』『増上寺の年中行事』『増上寺御霊屋尊靈法号一覧表』（大本山増上寺、一九九九年）も参照されたい。

(17)元文二年『日鑑』に、鎮西上人五百回忌に付き、宝庫にある画像を本堂東仏壇に掛け勤修の記事はあるが、毎年の『日鑑』には、徳泰院の命日法要の記載があっても、鎮西忌の記載はない。

(18)今堀前掲書（1）第Ⅲ部第四章第一節「オランダ人の訪問」。

(19)今堀前掲書（1）第Ⅴ部「東大寺大仏勧進と法然贈大師号」。

(20)十一月「七日」・山神祭礼。造酒並びに煮染一重・小豆餅百（但し、一銭充）、上納所より下納所へ渡し候事。

「八日」・稲荷御火焚き。小豆飯・白豆腐・造酒供える事。

「十五日」・今日、鎮守御火焚きに付き、今朝、阿弥陀堂・鎮守へ御参詣なし。八つ半比、御出駕。黒衣伴僧二人・中小姓兩人・徒士二人・山廻り一人・陸尺四人、日傘・御草履取り兩人、惣供一人。

阿弥陀堂参詣。大衆出仕、法要常の如し。それより鎮守御火焚き。阿弥陀経・（神力演大光の文）。小豆飯（米八升・小豆三升）・蜜柑

五十・落雁・岩起米・州浜・御造酒・大ゆ二つ・生大根はすに切る・煮染二重・香物一重。尊前はじめ奉り一山共に頂戴。右菓子

は人数積にて供える。御膳具并に大衆碗・折敷用意。小児共へにぎり飯遣わす事。

・江戸進物松茸漬、来春、江戸御内証御進物の積。松茸例年の如く御宿坊へこの節下す。勿論、足付桶、何十本入り何桶用意あるべき旨、御宿坊へ兼ねて申し遣わし置く事。

・入寒即日、方丈への機嫌伺いのため、六役中・山役中より紅梅糖・白梅糖・山吹飴、右三箱例格にて献上。御対面所にて直に披露。拝礼、御十念。畢つて奥茶堂へ伺候。寮主・内役面談。次ぎに寮主・内役・丈内中小姓迄、例の如く役所へ伺候事。

(21)今堀前掲書（1）第Ⅳ部第四章「知恩院の仏名会と御身拭い式―日本人の減罪信仰―」に、『年中行事録』十二月、『日鑑』により歳末行事を紹介している。

（いまほり たいつ 歴史学科）

二〇二〇年十一月十六日受理